

審査員
大竹 由夏(ものづくり大学技能工芸学部建設学科講師)
古谷 誠章(NASCA / 早稲田大学創造理工学部建築学科教授)
吉里 裕也(SPEAC / R 不動産 代表)
吉村 靖孝(早稲田大学創造理工学部 ME メジャー教授(建築学科兼任) / 吉村靖孝建築設計事務所)

メッセー

大竹 由夏

(ものづくり大学技能工芸学部建設学科講師)

第5回目に、ものづくり教育と建築文化の普及啓発に関して、受賞させて頂いたことが縁で、審査員を努めさせて頂くことになりました。日本では、かつて、畳は身近なものであり、誰もが感覚的にその枚数でおおよその広さを想像することができました。しかしながら、近年、畳の部屋で暮らした経験のない人が急増しており、この寸法感覚の共有が難しくなりつつあるそうです。また、このコロナ禍において、我々の生活は大きく変化しました。自粛生活が続く中、漠然とした不安や不満から、建築士だけでなく多くの人々が、日々、新しいライフスタイルとは何か、居心地の良い空間とは何かと問うています。これらの変化は、まるで建築士に、新しい空間設計を慌てて課しているかのようです。これからの建築とは何か？建築士は、この時代に何を求め、何を創造していくのか？これまでの建築文化を継承し、それでいて、これからの建築の可能性を広げる、そのような提案を期待しています。

古谷 誠章

(NASCA / 早稲田大学創造理工学部建築学科教授)

西欧で古来3大職能とされるのは「医者」「弁護士」「建築家」。日本の国家資格としては医者は医師、建築家は建築士にあたる。3大職能と言われても、医者や弁護士とはどこことなく趣が異なるのが建築士の実感だろう。なんとなく羽振りの良さも違うような気がする。思い当たるのが、医者や弁護士は、クライアントが、その人生の中の不幸な局面で訪れてくる。怪我をした、病気になった、具合が悪い、事件に遭った、トラブルに巻き込まれた、離婚だ等々、意気消沈し、気弱になって専門家を頼ってくる。いきおいその立場は患者や依頼者の方が弱い。一方でわが建築士の場合は、依頼者がその人生の最も幸福な時にやってくる。自宅を建てたい、新社屋や工場を建てたい、店を開きたい、依頼者の方には勢いがあり、元気がある。道理で立場も強い訳だ、コンペで競わされたり、設計料の相見積もりを取られたりする。なるほどそれでこちらの分が悪いのかなどと嘆いたりする。それでも幸福な人の幸福な夢を実現するのも十分立派な仕事だと思っていたが、しかし、阪神淡路や東日本大震災が起きて、改めて建築士にも医者や弁護士のような使命があることに気づかされた。家族を失ったばかりか、家を失い、街を失った人々の力になれるのもまた、建築士の尊い使命である。あるいは失われゆく自然環境や風土、消えゆく地域文化や歴史を次世代に引き継ごうとするのも、われわれになし得る大いなる役目である。私が思っても見なかったような「これからの建築士」に出会うのを心から楽しみにしている。

吉里 裕也

(SPEAC / R 不動産 代表)

建築士が、社会から求められる領域は日々拡大しているように思う。前回の提案は、素材開発から運営まで多くの領域に高い次元で関わり、それを建築というアウトプットに影響を与えるところにまで落とし込んでいくように感じた。それは、建築士の活動の領域が広がってきており、求められるスキルも変容しているということの意味しているのかもしれない。これからは、社会の課題を発見することが、ますます重要となってくると思う。昨今の特殊な時代の中で、多くのことが生まれたり、失われたりしていると感じている。一方、色々なものが削ぎ落とされて、大事なものが露出しているというようにも思う。そんな中で多くな課題に直面する機会も多い。今だから起こりうる、新たな試みを期待したい。

吉村 靖孝

(早稲田大学創造理工学部 ME メジャー教授(建築学科兼任) / 吉村靖孝建築設計事務所)

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、昨年、オンラインにて行われた審査の際にはまだ、まさか一年後にまた同じような状況下で審査を行うことになるとは想像しきれていなかった。これだけ長引いてくると、「これからの建築士」を問うこの賞も、パンデミックと無関係ではいられないだろう。今年、わたしが期待するのは、コロナ禍を経て建築士がどう変わるか、その新しい建築士像を予感させてくれるような応募者の出現である。パンデミック以前の社会において、停滞し「変わらなければならなかった部分」で、現行の制度や技術を用いれば「変わることが可能だった部分」に関しては、コロナを触媒として、この一年で概ね変わったように思う。その変化が建築の形態となって現れるのはまだ先のことだが、しかし、建築士の活動領域や活動形態は、むしろ情勢に敏感に反応して、すでに変化の兆しが出ている可能性があると思うのだ。この審査のプロセスは、コロナ禍で得た知見を共有し、これからの建築士像に思いを巡らせる貴重な機会になるだろう。審査員という立場ではあるが、応募者と議論できることを期待してやまない。